目　次

序 …… v

包括的・明示的な文法記述を求めて—私の見果てぬ夢—
仁田義雄 …… 3

「VN・VN」をめぐって
—「展示，即売」,「展示即売」に対する「展示・即売」—
小林英樹 …… 21

多寡を表す形容詞と存在動詞について
佐野由紀子 …… 33

語彙的要素と文法的要素の組み合わせ方と主題マーカーの相関関係
—「言語の類型的特徴をとらえるための対照研究」の立場から—
張 麟 声 …… 47

日本語の「は」と韓国語の「un/nun」との対応と非対応
鄭 相 哲 …… 63

日中受動文の受影性—結果性と前景化—
塩入すみ …… 81

副詞＋「の」による名詞修飾の諸相—書き言葉コーパス調査に基づいて—
野田春美 …… 97

日本語動詞における「制御性（意図性）」をめぐって
—語彙的意味構造と統語構造—
三宅知宏 …… 117

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

意志性の諸相と「ておく」「てみる」
森山卓郎 …… 135

「しようと思う／思っている」と「つもりだ」
―書き言葉における使用実態から―
高梨信乃 …… 151

関西方言の知識共有化要求表現の動態
日高水穂 …… 169

逆接条件文「テモ文」の「モード」をめぐって
前田直子 …… 185

トイッテ類の意味機能
―接続詞「トイッテ」・「カトイッテ」・「ソウカトイッテ」を含む文の分析―
高橋美奈子 …… 199

動詞の意味と引用節
阿部　忍 …… 211

評論的テキストにおけるダ体とデアル体の混用
安達太郎 …… 225

日本語文法研究と国語における文法教育
山田敏弘 …… 241

限定詞「この」と「その」の機能差再考
―大規模コーパスを用いた検証―
庵　功雄 …… 257

あとがき …… 273
執筆者一覧 …… 275

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

包括的・明示的な文法記述を求めて

—私の見果てぬ夢—

仁田義雄

1.　はじめに

私の見果てぬ夢は，コンピュータに対してであれ，その言語（私の場合，日本語）を全く知らない人間に対してであれ，当該言語の文法書と辞書があれば，自動的に，日本語の正しい文のみを作り出し，正しく解析できるような，完全な文法書と辞書を作成することである。言ってみれば，ドラえもんの「ほんやくコンニャク」に近いものを作ることである。

2.　私（仁田）が勉学を始めた頃

仁田が勉学を始め，研究もどきのものを行いはじめた頃は，山田孝雄を淵源とする陳述論（陳述論争）が，ある種の成就と終焉を迎えようとしていた時期である。一語文を自らの文認定・文成立論において重要な存在と位置づけ，統覚や陳述という概念・用語を設定し，句・文の成立に迫ろうとしていた山田の陳述論が，三宅武郎（1934）『音声口語法』での言及や時枝誠記（1941）『国語学原論』を経て，時枝への疑問提示を含む阪倉篤義（1952）『日本文法の話』，金田一春彦（1953）「不変化助動詞の本質」などが現れ，渡辺実（1953）「叙述と陳述」での展開，それへの修正を含んだ芳賀綏（1954）「“陳述”とは何もの？」が書かれ，さらに芳賀の修正的提案を受け入れた渡辺（1971）『国語構文論』が刊行されようとしていた時期である。

当時の文法研究の状況からの影響もあり，仁田は，単語が集まって文

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

「VN・VN」をめぐって

—「展示，即売」,「展示即売」に対する「展示・即売」—

小林英樹

1. はじめに

(1) ～ (3) は，同じような事態を表しているが,「展示，即売」,「展示・即売」,「展示即売」とゆれている。

(1) 全国の伝統工芸品を一堂に集めて展示，即売する第 9 回「職人の技」展が開催されます。 (毎日新聞 1998 年 4 月 23 日)

(2) 全国各地の伝統工芸品を展示・即売する第 20 回記念「職人の技展」を開催します。 (毎日新聞 2003 年 10 月 22 日)

(3) そんなスロベニアとスロバキア大使館が来月，特産のクリスタル製品やワイン，スキー板などを展示即売する合同特選市を開く。 (毎日新聞 1998 年 12 月 26 日)

「展示」,「即売」は，いわゆるサ変動詞の語幹，動名詞 (VN) であるので，(1) ～ (3) は,「VN，VN」,「VN・VN」,「VNVN」と表すことができる (個々の VN に言及する場合は，左側の VN を VN1，右側の VN を VN2 とすることにする)。本稿は,「VN，VN」と「VNVN」の中間的な存在である「VN・VN」について，下位タイプを取り出しながら，考察を加えていく。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

多寡を表す形容詞と存在動詞について

佐野由紀子

1. はじめに

多寡を表す形容詞「多い」「少ない」については，これまで多くの先行研究において，「ある（以下「いる」も含める）」等と共に「存在」を表す表現であることが述べられてきた。

そもそも形容詞の多くは，ある物事の存在を前提として，その性質を述べるものであることに加え，「多い」「少ない」は数・量に関わる表現である。このため，当然「多い」「少ない」と存在動詞は意味的に類似するといえる。特に「多い」「少ない」とより意味的類似性を持つ「たくさんある」「少ししかない」等との間で，互いに置き換え可能な例は多い。

（1）　アテネ五輪に出場した選手にも教え子は多い（たくさんいる）。
（『Tarzan』2004 年 9 月 22 日号）[1]

（2）　外見だけではわからないことがたくさんある（多い）。
（宮前淳子『対人関係ゲームによる仲間づくり』）

（3）　発病後より言葉の出にくい感じがあるため，自発的な発語は少ない（少ししかない）。　（中島洋子ほか『回想法ハンドブック』）

（4）　日当たりと排水がよい環境を好み，岩組など土壌が少ししかない（少ない）場所でもよく育つ。
（土橋豊『カラー・ガーデニング』）

1　本稿における例文は「現代日本語書き言葉均衡コーパス」（国立国語研究所）から収集した。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

語彙的要素と文法的要素の組み合わせ方と主題マーカーの相関関係

―「言語の類型的特徴をとらえるための対照研究」の立場から―

張　麟声

1.　はじめに

「言語の類型的特徴をとらえるための対照研究」とは，橋本萬太郎（1978）『言語類型地理論』，山本秀樹（2003）『世界の諸言語の地理的・系統的語順分布とその変遷』によって指摘された語順類型論の弱点を克服するために，提唱した一研究モデルである。この研究モデルでは，SVO，SOV，VSO といった語順的な指標と，「孤立」，「膠着」，「屈折」といった形態レベルでの指標とが二重に用いられることになる。ここで言う「孤立」，「膠着」，「屈折」といった概念に関しては，19 世紀の姿のままではなく，語彙的要素と文法的要素の合わせ方を重視する立場から再定義されている。再定義の初歩的な作業を筆者は張麟声（2015）及び張（2016）において行ってきており，その作業の結果をより説得力のあるものに修正し，言語における主題マーカー生起の可能性との相関関係について検討するのが本稿の目的である。

以下，第 2 節において，19 世紀の「孤立」，「膠着」，「屈折」といった概念のあり方，及び，それに関するいくつかの重要な批評を述べた上で，張麟声（2015），張麟声（2016）でたどりついた考え方を紹介する。続く第 3 節においては，その考え方を，語彙的要素と文法的要素の合わせ方という角度から，より緻密な再定義の可能性を探る。そして，第 4 節においては，前節で完成した再定義を駆使して，同じ SOV 言語でありながら，一部の言語に主題マーカーが生起しやすく，一部の言語に生起しに

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

日本語の「は」と韓国語の「un/nun」との対応と非対応

鄭　相哲

1.　はじめに

日本語の代表的な助詞の一つである「は」と「が」は概略韓国語の「은 / 는 (un/nun)」と「이 / 가 (i/ga)」に対応するものとして教えられている。このような指導法は，韓国語を母語としている初級や中級レベルの日本語学習者を対象とした場合は適切な方法かもしれない。しかし，上級レベルの日本語学習者には不適切で不十分な側面もあると思われる。次例を見よう。

(1)　호경 : 아 증말 짜증나 .. 아저씨들 도대체 뭐에요 ?
전통 : 아저씨라니 시 ..
험상 1 : 그러는 넌 뭐냐 ?
호경 : 난 이 촌닭하고 , 아니 오빠하고 , 아니 둘 다 아 시 할 얘기가 있는 사람이라구 .
험상 2 : (지훈에게) 어린 놈이 아주 복잡하게 사는구나 ... (동감 내기)
ホキョン : あ！本当にムカつくなあ。オジサン達，一体何ですか？
ゼントン : 何！　オジサンだと。
ヒェムサン 1 : そういうお前は何だ？
ホキョン : 私はこの田舎者と，いやお兄さんと，いや二人に話がある者だよ。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

日中受動文の受影性
―結果性と前景化―

塩入すみ

1. 本稿の背景と目的

ヴォイスは印欧語古典文法における概念から，主語と行為の間の意味関係としてとらえられる（柴谷 2000，坂原 2003）。ただし，その意味関係は各言語により異なり，例えば英語やフランス語の受動は主題性の再調整という意味合いが強い（坂原 2003）が，日本語や中国語等のアジア諸語の受動は被害の概念と密接に関わる（Li and Thompson 1981，堀江・パルデシ 2009）。

ヴォイスに関する言語間の意味・機能的な違いを踏まえつつ，近年対照研究と言語類型論の研究は，普遍性と多様性の追求という共通の目的により近付きつつある（生越 2002）。受動文研究について見てみると，井上・生越・木村・鷲尾（2005）は，Washio（2000）・鷲尾（2005）により提案された「BECOME 型（非対格型）／ AFFECT 型（他動詞型）」という受動の類型を用い，日本語・中国語・韓国語における受動の対照研究の成果を発展させ，受動の類型を考察している。

一方，認知類型論の立場に立つ堀江・パルデシ（2009）は，受動構文を言語の主観性の一指標としてとらえ，日本語では受影の有無に関わらず語り手もしくは語り手が共感する人物の視点から事態を把握し，描写する傾向が他言語より強いことを指摘している。堀江・パルデシのアプローチは，これまで各言語の受動に関して研究されてきた概念が他言語との共通するスケールとして再考される可能性を示している。だが，視

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

副詞＋「の」による名詞修飾の諸相

―書き言葉コーパス調査に基づいて―

野田春美

1.　はじめに

副詞は，定義や記述の難しい品詞である。活用せず，動詞・形容詞（イ形容詞・ナ形容詞）・ほかの副詞を修飾するというのが基本的な性質だが，「ぴかぴかの机」「まさかの結末」というように「の」を介して名詞を修飾したり，「ぼろぼろだ」「さすがだ」というように「だ」を伴って述語になったりするものもある。

仁田（2002, p. 2）では，次のように述べられている。

> 副詞的修飾成分は，雑多であり，語彙的な側面の強いものである。そういったものを，文法研究として，いかに体系的に分析・記述し組織化していくかが，今後の重要な課題となろう。

そこで本稿では，副詞＋「の」が名詞を修飾する場合について，書き言葉コーパス調査によって実態を把握し，分析を試みる。

2.　先行研究

2.1　副詞の名詞性

加藤（2003）は，「連用修飾成分は全般に，名詞と共通する性質を持っている」（p. 425）とし，「これまで名詞，形容動詞（の語幹），副詞とされてきたもののほとんどと連体詞とされてきたものの一部」（p. 522）を《実詞》として位置づけ直すことを提案している。加藤（2013, p. 34）では《体詞》と呼び変えられ，「体言を中心的要素として含む，体言的なものの大

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

日本語動詞における「制御性(意図性)」をめぐって
―語彙的意味構造と統語構造―

三宅知宏

1. はじめに

本稿は，日本語動詞の語彙的な意味構造における「制御性（意図性）」（“CONTROL”）という概念について，再考することを目的とする。

影山（1993）の語彙概念構造のモデルでは，「制御性（意図性）」を表す概念として“CONTROL”が設定され，そして，それは階層的な構造の最上位に位置し，いわゆる「非対格性」を決定するものとされていたが，影山（1996）以降のモデルでは，このような仮説は全て放棄されてしまっている。目的を「再考」としているのはこのためである。

本稿の主張は，影山（1993）のモデルで設定されていた「制御性（意図性）」（“CONTROL”）が，日本語における様々な言語事実の分析という記述的な面からも，また，ミニマリズム理論における統語構造との関係という理論的な面からも，重要かつ有用であり，放棄されるべきものではないという点に集約される。

本稿は，次のような構成によって，論を展開する。

まず，2. において，影山（1993）のモデルを紹介し，3. において，影山（1996）以降のモデルを批判的に検討する。その上で，4. において，日本語動詞の語彙的な意味構造として適切なモデルを提案し，5. において，その意味構造が反映されるべき統語構造について論じる。6. において，まとめを行う。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

意志性の諸相と「ておく」「てみる」

森山卓郎

1. はじめに

意志・無意志，あるいは自己制御性という問題は，事態の発生の仕方について日本語がどのように扱うかという問題である[1]。動詞の語彙的意味として問題にされてきたことであり，様々な文法現象の説明に用いられてきている。

ただし，意志・無意志と文法形式との関係は，実は単純ではない。ある事態が無意志的であるという場合にも，そこには様々な要因がある。この場合，意志・無意志という単純な二分法でいいのかということも検討される必要がある。

例えば，「知る」は無意志動詞とされ，命令文にはならず，

(1) *遊びを知れ。

のようには言えない。しかし，「ておく」を共起させた場合には，

(2) 養父は「お前はいずれ商売相手を接待することがある。遊びも知っておけ。ただし，遊ぶのなら一流の女と遊べ」といったという。 （橋本克彦『森に訊け』BCCWJ）

のように，命令文で使われても違和感がない。ただし，「ておく」自体はそのまま終止する場合に「知る」に共起しない。例えば，

(3) *私はこのことを知っておいた。

1 自己制御性という呼び方もある（久野（1973））。ただし，本稿の関心の範囲では，基本的意味は同じであり，ここでは，意志性という用語を使用する。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

「しようと思う／思っている」と「つもりだ」
—書き言葉における使用実態から—

高梨信乃

1. はじめに

現代日本語のモダリティの記述的研究はこれまで盛んに行われてきた。形式を記述する際に重要なポイントとなるのは，隣接する形式の間の異同である。これまで類義関係にある複数の形式の間にある細かな意味・性格の違いを明らかにしようとする研究が数多くなされてきた。しかし，その違いを考える方法として，それぞれの形式の使用実態に照らして考察するという作業は，必ずしも十分には行われていないように思われる。

本稿では，意志の形式である「しようと思う」(「しようと思っている」)と「つもりだ」を取り上げ，書き言葉における使用実態からそれらの意味・性格の違いに考察を加えてみたい。

2. 先行研究と本稿の目的

まず，先行研究の重要な指摘をまとめておく。

意志を表す中心的な形式は動詞の意向形「しよう」である。「しよう」を言い切りで用いる文は，基本的に〈意志の表出〉を表すとされ，①発話時に生起した話し手の意志を，②聞き手への伝達を意図せずに発するものであることが指摘されている（森山 1990, 仁田 1991, 安達 2002）。

(1)　あ，6 時か。もう帰ろう。〈意志の表出〉

(1) を，話し手の意志を聞き手に伝達する〈意志の伝達〉の文にするためには，「と思う」を付加する必要がある。そして，「と思う」の付加に

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

関西方言の知識共有化要求表現の動態

日高水穂

1. はじめに

関西方言には，否定疑問形の「ヤンカ」による確認要求表現がある。関東方言の「ジャンカ」と同様に，(1) のような話し手と聞き手の間の共有知識を活性化させる用法で用いられる。

(1)　AがBと一緒に旅行に行く予定であることを話題にする場合

A　「来週，旅行に {行くやんか／行くじゃんか}」

B　「うん」

さらに，関西方言の「ヤンカ」には，ノダ文に後接した「ンヤンカ」の形で，聞き手にとって未知の情報を提示し，その情報を共有した上で話題を展開する (2) のような表現がある。この表現をここでは，確認要求の疑問文の一類として，「知識共有化要求表現」と呼ぶことにする。

(2)　AがBと一緒に旅行に行く予定であることをCに告げる場合

A　「来週，私，Bさんと旅行に行くんやんか」

C　「そうなんや」

「ンヤンカ」が知識共有化要求表現として機能するのは関西方言の特徴であり，関東方言の「ンジャンカ」にはそうした機能はない。関東方言で，これに近似する機能をもつのは，「ンダヨネ」という形式であろう。

(3)　AがBと一緒に旅行に行く予定であることをCに告げる場合

A　「来週，私，Bさんと旅行に {*行くんじゃんか／行くんだよね}」

C　「そうなんだ」

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

逆接条件文「テモ文」の「モード」をめぐって

前田直子

1. はじめに

仁田（2009）では，条件表現とモダリティ諸形式との共起関係を検討する中で，条件表現に描き出される叙述世界を「モード」と名付け，次のように定義・分類した。

（1） 文の叙述内容として描き取られている事態が，どの世界での存在として捉えられ描き出されるのかを，仮に《モード》と呼んでおこう。（p. 208）

（2） モードには，《現実モード》と《想定モード》があり，想定モードには《非事実モード》と《反事実モード》がある。（p. 208）

本稿は，仁田（2009）で提示された条件文の「モード」について，特に逆接条件文である「テモ文」のモードについて考察する。

2. モードとは

仁田（2009）にある上記（2）によれば，「モード」は次のように 3 分類されることになる。

（3） モード ┬ 《現実モード》
　　└ 《想定モード》 ┬ 《非事実モード》
　　└ 《反事実モード》

そして 3 つのモードについて，次のように説明されている。

（4） 現実モードとは，叙述内容として描き出されている事態を現実

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

トイッテ類の意味機能

―接続詞「トイッテ」・「カトイッテ」・「ソウカトイッテ」を含む文の分析―

高橋美奈子

1. はじめに

日本語の逆接表現[1]の中には，引用提示を行う形式「トイウ」を内部に含むものがいくつか存在する。

(1) 本当は，こんな台風の日に外出したくない。{しかし／けれども／と（は）いっても／とはいうものの／といって／かといって／そうかといって}，出勤しないわけにはいかない。

(2) 暦の上では春になった {が／けれども／と（は）いっても／とはいうものの／といえど（も）／とはいいながら}，連日けっこうな降雪がある。

(1) の文連続に介在する接続詞，および (2) の文中に介在する接続助詞のうち「ト（ハ）イッテモ」，「トハイウモノノ」，「トイエド（モ）」は，引用提示を行う「トイウ」に逆接や逆条件の形式が加わった形式であり，これらが逆接の機能を持つことに不思議はない。他方，やはり (1) 中に介在する接続詞「トイッテ」「カトイッテ」「ソウカトイッテ」―本稿ではこれらを一括する場合「トイッテ類」と呼ぶ―は，形の上では引用提示を行う「トイウ」のテ形，もしくはそれに「カ」「ソウカ」が前接したものであり，その内部に逆接を表す形式を特に含まないが，(1) では逆接の接続表現として機能している。

1　逆接の接続表現とは「前件から想定される内容に，後件が反する・対立することを示すもの」とする。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

動詞の意味と引用節

阿部　忍

1.　はじめに

阿部（1999）は，引用の助詞「と」を伴って現れる引用節を，述語動詞との関係から次の 3 つのタイプに分類した。

Ⅰ．補足的引用節

Ⅱ．展開的引用節

Ⅲ．付加的引用節

「補足的引用節」とは，（1）のように動詞によって要求される引用節である。

（1）　太郎はコーヒーが好きだと言った。

「展開的引用節」とは，（2）のように動詞の意味を展開する引用節である。

（2）　学長は受験生の質が落ちたと嘆いた。

「付加的引用節」とは，（3）のように主文の述語句を修飾する引用節である。

（3）　学は授業が始まりそうだと廊下を急いだ。

これに対し藤田（2006）は，上記のタイプ分けについて幾つかの問題点を指摘し，特に展開的引用節を特立することに対して批判的に論じている。

そこで本稿では，藤田の批判に応えることと合わせ，上記のタイプ分け，特に補足的引用節と展開的引用節の区別の必要性について検証し，

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

評論的テキストにおけるダ体とデアル体の混用

安達太郎

1. はじめに

日本語は聞き手に対する待遇性を述語の形態に必須的に反映させるという特徴をもつ言語である。待遇性に関わる文法カテゴリーを仁田(2009)は〈丁寧さ〉と呼んでいるが，本稿では〈スタイル〉という名称で呼ぶことにしたい。仁田はこの文法カテゴリーについて，動詞述語ではていねい体と非ていねい体の二項対立で表されるのに対して，形容詞述語と名詞述語ではこれに「～ゴザイマス」のようなスタイルを加えた三項対立をなしていること，また，スタイルに関わる形式が他形式と融合して現れるため，文法カテゴリーの階層構造の中に位置づけにくいことなどを指摘している。

第二の指摘はスタイルを表す形態がいまだに過渡期的な性格をもっていることを示していると考えられるが，本稿では第一の指摘を出発点としたい。述語の品詞によってスタイルの分化が異なるという事実は，待遇性という観点において，日本語話者が動詞述語と形容詞述語・名詞述語とで異なる発想を必要としていることを意味しており，興味深い。

文章日本語では問題はさらに複雑になる。特定の述語にのみ非ていねい体としてダ体とデアル体というふたつのスタイルが存在するからである。この観点から見ると，非ていねい体のテキストには，1）ダ体を一貫して用いるもの，2）デアル体を一貫して用いるもの，3）ダ体とデアル体を混用するものの 3 タイプが存在することになる。本稿では，ダ体とデ

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

日本語文法研究と国語における文法教育

山田敏弘

1. はじめに

それぞれの学問領域には，特にめざましい発展を遂げる時期というものがある。日本語研究については，1980 年代からの日本語教育文法の必要性も手伝って，前世紀末にめざましい発展を遂げた。その節目の一つが仁田（1980）に代表される「語彙論的統語論」という考えであることは疑いがなく，現在，文法研究に携わっている者の多くは，この成果の中にいる。

一方，実際の教壇で異なる立場から文法を語る本論文集執筆陣は，それぞれの文法研究のみならず文法教育に対して，個別の理想を抱き各種テーマの下，文法を論じていることであろう。だが，学校文法と現代日本語文法研究の接点に立たされる教育学部教員としては，隔靴掻痒の思いを抱いてやまない。それは，両者の乖離が看過できないほどに大きくなったことのみならず，この日本語文法研究の成果が，いっこうに，国語の文法教育に役立つものになっていかないためである。現在主流となっている現代日本語文法研究の潮流においても，この国語教育への還元意識が，依然として十分高く共有されているとは言いがたい。

国語教育の文法に多くの提言をしてきた文法研究は，永野（1958, 1961）や三上（1963a）に代表されるように，少なくない。しかし，その中で，学ぶものの立場や現場で教える教師の立場は，半世紀前の永野の一連の研究を除き，決して常に意識の中心にあったとは言えない。「より

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers

限定詞「この」と「その」の機能差再考

―大規模コーパスを用いた検証―

庵　功雄

1.　はじめに

日本語研究の中で名詞（句）に関する議論は盛んだとは言えない。これは，日本語に冠詞がないことによるのかもしれない（日本語における冠詞の問題については庵（2003）を参照）。ただ，福田（2016）なども現れ，今後この分野の議論が活性化することが期待される。

論者もこれまで名詞（句）に関する拙論をいくつか公にしてきた（庵 1995, 1997, 1999, 2007, 2016, Iori 2013）が，庵（1997）（以下，前稿と呼ぶ）では，限定詞「この」「その」，と「は」と「が」の選択の相関について，定量的データを用いて論じた。ただ，その当時のデータにはコーパスのサイズや内容に偏りがあったため，その結果が現在の大規模コーパスにおいても妥当であるのかについては再度検証する必要がある。本稿では，この点を確かめるために，現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を用いて前稿の内容を検証した結果を報告する。

2.　前提となる概念

本節では，本稿の議論の前提となる概念を紹介する。なお，紙幅の関係で説明は概略的にならざるを得ない。より詳しい議論については，庵（2007）を参照されたい。

BOOK SAMPLE ©Kurosio Publishers